

進化論

藤井 修平

(伊藤幹治「進化論」『宗教学辞典』1973年版に続けて)

宗教学の分野で「進化論」という言葉が用いられる文脈は様々であるが、当分野における進化についての言説は、主に三つの異なった観点に分類できる。

①宗教、とりわけキリスト教の世界観と対立するものとしての進化論。この観点においては、宗教史の一部として、ダーウィンの進化論が宗教思想に対して与えた影響や、創造論と進化論の対立の歴史などが考察の対象になる。②19世紀に隆盛をきわめた宗教進化論。これは発展的な諸段階の類型から「宗教の進化」を語るものであり、後に様々な点から批判がなされたが、この形式の言説は現代においても存続している。③20世紀後半から拡大した進化的生物学の見地を宗教に対して適用する諸理論。これに属する主張は社会生物学や進化心理学といった分野から行われている。

以上の三分類は互いに無関係なものではないが、①は宗教学上の学説に関するものではなく、また②と③の間には必ずしも影響関係が見られるわけではない。これらを混同することは議論の混乱をまねく恐れがあるので、個別に論ずることがふさわしい。『宗教学辞典』の「進化論」項目では②のみが扱われており、現在盛んに議論がなされている③についての記述を欠いている。その不足を補うべく、本稿ではとりわけ③に分類される生物学的宗教理論を扱うこととする。

【社会生物学の登場】 生物学的宗教理論が旧来の宗教進化論と異なる点は、それが広義の進化論にではなく、20世紀後半に成立した現代総合説に基礎を置いている点である。こうした手法を最初に用いたのは生物学者のエドワード・ウィルソンであった。彼は『社会生物学』(1975)において集団遺伝学の観点から動物の社会行動を説明し、この手法は人間にも適用可能だとしてあらゆる生物の行動を現代総合説を用いて説明する「一般社会生物学」を提唱した。彼はその後『人間の本性について』(1978)や『知の挑戦』(1998)においてこれを実践し、宗教に対しても分析を行っている。社会生物学の観点からは、宗教を信じるための能力は人間の遺伝子に組み込まれているとされ、宗教は文化的現象が遺伝子の影響を受ける例の典型となっている。ウィルソンによれば、宗教を信仰することで何らかの生存のための利益が得られたゆえに、制度として宗教が存続してきたのだという。ここで想定されている宗教の利点とは、個人を説得して利己的な関心を抑えさせることによって集団を結束させるというものである。こうした利益のゆえに、宗教を信じる能力をもたらす遺伝子はそうでない遺伝子より広まることが可能となったのであり、その結果として世界中で宗教が見られるようになったとウィルソンは主張している。

【社会生物学に対する批判と理論の修正】 ウィルソンの提唱した社会生物学は、人間のあらゆる行為や制度が遺伝的な基盤を有していることを仮定しており、このことはこれらの行為や制度

を好む傾向を後天的に変えることができないという含意を持っているために、遺伝的決定論であるとして批判された。このような批判を受けて、行動生態学者ジョン・オルコックの『社会生物学の勝利』(2000)では、社会生物学は遺伝子に基盤を持つ行為や制度が根絶不可能であったり、「正しい」ものであるとすることは避けると述べられている。加えて、人間は他の動物とは異なりあらゆる行動を生得的に獲得しているわけではなく、文化によって伝達されるものも存在するという批判も行われ、その結果として、「遺伝子と文化の共進化理論」と呼ばれるものが生まれることとなった。この理論は、遺伝子は特定の観念や行動を好むように作用するが、文化的影響もまた集団内の遺伝子の頻度に影響を及ぼすために、両者は相互的に進化するというものであり、自然人類学者のウィリアム・ダラムなどによって主張されている。

また、動物行動学者リチャード・ドーキンスが提唱した「ミーム」を用いた研究も新たな可能性として提起されている。ミームとは人間が記憶する観念や振る舞いの単位であり、模倣によって伝達される。ミームが考案された背景には、人間の文化は世代交代を介さずともコミュニケーションによって「ラマルク的に」伝達される点で遺伝子とは大きく異なるため、その研究方法もまた別であるという、社会生物学への批判が存在している。遺伝子が人を媒体として広がるように、ミームも人を「乗り物」として伝播するのであり、遺伝子とのアナロジーによってその広がり方や傾向を考察するのがミーム学である。ドーキンスによる『神は妄想である』(2006)では、このような観点から宗教が取り扱われている。彼によれば、宗教は幅広く伝達されるだけの魅力を持った「心のウィルス」であり、宗教自体は必ずしも適応的でない、すなわち信奉者に利益を与えないとされている。

【進化生物学と認知科学の結び付き】 生物学的宗教理論は遺伝的に獲得された人間の心的性向が宗教を生み出すという主張を軸としているが、こうした見解は認知科学の姿勢と適合するものであったために、両分野は結び付いて発展を続けている。その結び付きの結果の一つが、1992年に誕生した進化心理学である。デイヴィッド・バスは『進化心理学』(2008)においてこの分野の基本概念を解説しているが、バスによれば進化心理学は、人間に備わっている「進化した心的メカニズム」の解明を試みるものだとされている。この概念は人間が好む特定の思考様式を意味しており、そうした思考様式は進化的適応環境(EEA)である石器時代に遺伝子に組み込まれたために、世界中の人間に普遍的に見られるとしている。ジェシー・ベリングの『ヒトはなぜ神を信じるのか』(2011)では進化心理学の観点から宗教に対する考察が行われているが、ここでは他者の心を推論する能力が人間に社会性を与えており、道徳的に正しい振る舞いをしているかどうかを監視する超越者という観念も、この能力によって生み出されたという主張がなされている。

また、国内における研究としては、長谷川寿一と長谷川真理子による『進化と人間行動』(2000)において、認知科学の心的モジュールの概念と進化生物学を組み合わせ用いており、『21世紀の宗教研究』(2014)では同様の視点から宗教を生み出す人類共通の認知的能力が探究されている。

【主要な論点—宗教は適応の産物か】 このように批判を受けながらも発展および多様化してきた生物学的宗教理論であるが、そこにはこれらの理論に特有の論点が存在する。それは「適応主

義」と、そこから導かれる宗教は適応か否かに関する議論である。適応主義は生物学的宗教理論が基盤としている現代総合説に由来する見解で、この観点からは生物のあらゆる形質や行動は環境に対して十分に適応しているとされる。適応とは、考察の対象となる形質や行動から得られる利益が、それに費やされるコストを上回っていることを意味しており、本人に害をもたらすような行動は長い選択の過程で消えていくために、現在存続しているものは何らかの利点が存在するゆえに生き残っていると推定される。哲学者エリオット・ソーバーの『進化論の射程』(2000)によると、生物学において適応主義は一種の教義となっているという批判も行われているが、適応主義はあくまで一つの方法論であり、現時点では生物学で最も成功している方法だと述べられている。

こうした観点の下で、宗教は適応の産物とみなせるかどうかについて研究者の間で論争が行われている。この点に関する見解の相違は、宗教から利益を得る主体を何と想定しているかに由来している。前述のウィルソンの場合、宗教のもたらす利益は集団の結束であり、その受益者は宗教の成員全体となっている。一方ドーキンスや哲学者のダニエル・デネットは、宗教を他の目的のために獲得された心的能力が生んだ副産物だとみなしている。ここで示されているのは、人間の有する周囲の環境に行為者や目的を感知するための能力の誤作動ないし過剰活動によって宗教が生まれたとする見解であり、宗教を専門に扱う分野である宗教認知科学においても同様の見解がとられている。

以上に述べたような、現代総合説の見地を人間に対して適用する理論はウィルソンによって提唱されて以来、いくつかの学派の派生や認知科学との合流を経て、一つの分野としての地盤を築くに至っている。そうした分野がもたらす宗教についての見解への評価はまだ定まっていないが、これらの理論の急速な拡大が及ぼす影響力は少なからぬものであると考えられる。

[参考文献]

- 井上順孝編『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点』, 平凡社, 2014年
 長谷川寿一, 長谷川真理子『進化と人間行動』, 東京大学出版会, 2000年
 松本俊吉編著『進化論はなぜ哲学の問題になるのか—生物学の哲学の現在』, 勁草書房, 2010年
 Alcock, John. *The Triumph of Sociobiology* (New York, Oxford University Press, 2000). 長谷川真理子訳『社会生物学の勝利—批判者たちはどこで誤ったか』, 新曜社, 2004年
 Bering, Jesse. *The Belief Instinct: The Psychology of Souls, Destiny, and the Meaning of Life* (New York, W. W. Norton & Company, 2011). 鈴木光太郎訳『ヒトはなぜ神を信じるのか—信仰する本能』, 化学同人, 2012年
 Buss, David M. *Evolutionary Psychology: The New Science of the Mind*. 3rd ed. (Boston, Pearson/Allyn and Bacon, 2008).
 Dennett, Daniel. *Breaking the Spell: Religion as a Natural Phenomenon* (New York, Viking, 2006). 阿部文彦訳『解明される宗教—進化論的アプローチ』, 青土社, 2010年
 Dawkins, Richard Clinton. *The God Delusion* (London, Black Swan, 2007). 垂水雄二訳『神は

妄想である——宗教との決別』, 早川書房, 2007年

Sober, Elliott. *Philosophy of Biology*. 2nd ed. (Boulder, Westview Press, 2000). 松本俊吉, 網谷祐一, 森元良太訳『進化論の射程——生物学の哲学入門』, 春秋社, 2009年

Wilson, Edward O. *On Human Nature* (Cambridge, Harvard University Press, 1978). 岸由二訳『人間の本性について』, 思索社, 1980年

Consilience: The Unity of Knowledge (New York, Vintage Books, 1999). 山下篤子訳『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』, 角川書店, 2002年